

対話をすれば、

何でも哲学になる

——自分で考える大切さを 体感するために——

梶谷
KAJITANI
Shinji
真司

愛知県碧南市に「哲学たいけん村無我苑」という施設がある。大正から昭和にかけての地で活躍した宗教思想家、伊藤証信が一九三四年に創立した研修道場「無我苑」の跡地を遺族が市に寄贈し、建物を再建。市の文化施設として一九九二年に開苑した。証信や名誉村長の故・梅原猛に関する常設展示やギャラリーのある瞑想回廊、講座が行われる研修道場（安吾館）、茶室、瞑想の丘、哲学の小径などからなる複合施設である。

伊藤証信は一八七六年、現在の三重県桑名市の農家に生まれた。熱心な真宗門徒であった両親の影響でみずから出家し、真宗大谷派円授寺

で得度した。京都の真宗大学（現・大谷大学）において、同じく真宗大谷派の僧侶で宗教哲学者でもあった清沢満之に学ぶ。父の看病のさいの霊的体験により「無我の愛」を感得。東京の巣鴨に「無我苑」を開き、その思想を広めた。後年、現在の碧南市に移り住んで無我苑を移し、仏教のみならずキリスト教や西洋哲学をも研究し、農家の青年たちにも教えた。著書に『無我愛の真理』（一九二二）、『哲学入門』（一九三二）、『無我愛の哲学』（一九三三）などがある。

碧南は満之が眠る地でもあり、生きた思想の痕跡がそこかしこにある。哲学たいけん村無我

苑は、そんな碧南に息づく人々と哲学の近しい関係の歴史を引き継いでいるのかもしれない。

私は二〇一八年からここで「哲学対話」というものを行っているが、それはある縁がきっかけだった。開苑以来講座の企画を担当しておられた顧問の久野昭先生から、二〇〇一年にはじめて講義をお願いしたいとお声がけをいただいた。その後先生とは年に一度年賀状をやり取りするだけであったが、それで覚えていくだけだったのか、二〇一八年の春と秋にもお誘いいただいた。哲学対話の活動を始めてすでに五年たったので、秋に入門編として「対話とし

ての哲学」の講義と、哲学対話の体験ワークショップを行うことにした。

それまで無我苑の哲学講座は、思想や哲学に関する講義が一般的で、参加者は年配の男性が多かったらしい。ワークショップというものが珍しかったのか、あるいは「対話」という言葉に惹かれたのか分らないが、急に女性が多く参加し、さまざまな年齢の人が来た。無我苑としても、より多くの幅広い年代の人に来てほしいとのことで、二〇一九年度以降は私が企画に関わって、哲学対話をメインに行うようになった。以来、毎回若い人から年配の人まで、大勢の方々が参加している。

二〇二〇年からはコロナ禍の中、オンラインでの開催となった。地元の人には減ったが、全国から参加者が集まるようになり、無我苑は広く知られるようになった。二〇二二年は地元の人々の要望もあって、時おり対面+オンラインのハイブリッドで行ったが、運営上の難しさから、今年度は、対面の回とオンラインの回を分けて行っている。

さて、哲学対話とは、十人〜二十人くらいの人數で、一つの問いについて一緒に考えることである。喫茶店のようにもともとテーブルがあるところで行う場合は除いて、たいていは椅子だけでサークル状に座って行う。哲学の知識は

不要なので、どんな人でも参加できる。テーマは、存在や認識、善や正義といったいわゆる哲学の問題でなくてもいい。むしろ「年をとったと思うのはどんな時か」「愛にお金は必要か」「なぜ勉強しないといけないのか」といった、それぞれの人が生活の中で出会う身近な問いについて考える。

ただし普通に話をする、たんなるおしゃべりや議論になりやすいので、対話のルールを決めている。実践者によっても違うが、私は以下の八つをルールにしている。

- ①何を言ってもいい。
- ②否定的な態度をとらない。
- ③お互いに問いかけるようにする。
- ④発言せず、ただ聞いているだけでもいい。
- ⑤知識ではなく、自分の経験にそくして話す。

⑥話がまとまらなくてもいい。

⑦意見が変わってもいい。

⑧分からなくなってもいい。

最初の①「何を言ってもいい」はもともと本筋的なルールである。他の七つはそのためにあると言ってもいい。考えることにとって重要なものは自由である。常識や偏見にとらわれることなく、物事をより深く、今までとは異なる側面から考えることができる。そのためには、自由にものが言えなければいけない。

しかし私たちは普段、人から否定されるのが怖くて自分の思ったことが話せない。人からどう思われるのかを気にしてしまう。馬鹿だと思われるかもしれない。笑われるかもしれない。怒られるかもしれない。あるいは、人からよく思われたい。賢いと思われたい。そんなふう、自分の考えよりも他人の考えに合わせて話している。

そうしなくていいように、②「否定的な態度をとらない」というルールがある。絶対に自分が否定されることはないということが分かっている。たいていは、私たちは自由に話すことができず、ただし、否定してはいけないと言っても、賛成・共感しないといけないわけではない。共感も理解もできない場合は、ただ問いかければいい。そうすれば、賛成できなくても、相手が必要ないように考えるのか分かる。

だから③「お互いに問いかけるようにする」というルールがある。とはいえ、日常生活では質問するのは難しい。詮索好きだと思われるかもしれない。こんなことを聞いたら、馬鹿だと思われるかもしれない。相手が不快に思うかもしれない。……しかも質問というのは、不満や怒りの現れであることが多い。先生が生徒に「何で宿題をやったのかなかったんだ？」と聞く時、それは質問しているというより怒っている。このように問うのも問われるのも危険であ

り、容易にはできない。それに対して哲学対話では、一緒に考えるために問うのであって、他に意図はない。だから何でも問えばいいし、問われたら安心して答えればいい。

ルール④「発言せず、ただ聞いているだけでもいい」も重要である。何か話さないといいけないと思うと、かえって話せなくなったり、その場しのぎのことを言ってしまう。言いたいことを言いたい時に言えればいい。黙っている自由がなければ、話す自由もないのである。

次の⑤「知識ではなく、自分の経験にそくして話す」は、できるだけいろいろな人が参加できるようにするためのルールである。私たちが話に参加できなくなる主な要因は、知識の欠如である。ここで言う「知識」とは、本に書いてあるようなこと、専門用語や業界用語のように、特定のところで使用される知識である。そのような知識を使わず、自分の経験にそくして普通の言葉で話せば、誰でも対話に参加できる。

また、言いたいことがまとまらないと話せない人は多い。だから何か話したければ、とりあえず言葉にしてみればいい。うまく伝わらなくても、他の人は何かしらそこから受け取って対話を続けてくれる。だから⑥「話がまとまらなくてもいい」というルールがある。さらに、哲学対話は、自分の立場を主張したり守ったりす

る場ではない。一緒に考えているだけなので、⑦「意見が変わってもいい」し、むしろ変わるのが自然である。ずっと自分の意見に固執して変わらないなら、対話する意味はない。

最後の⑧「分からなくなってもいい」は、もっとも哲学対話らしいルールである。私たちは普段、分かることを目指し、最後は「分かりました」と言ったり言わされたりする。けれども、そんなふうになっていると、分かることしか考えなくなるか、分かっているのに分かかった振りをするようになる。分からなくなるのは、問いが増えること、したがって考えることが増えることなので、より哲学的になれるということである。

このようなルールのおかげもあって、とにかく哲学対話は誰でも参加できて、いつも楽しい。「哲学が楽しい」「考えるのが楽しい」という意外な経験が、人気の秘密なのかもしれない。

哲学対話のテーマは本当に何でもよいので、哲学たいけん村で本格的にワークショップを始めた二〇一九年には、自分としてもきわめて実験的なことを試みた。そのさい私は、その場所で行う必然性を考えるようにした。

碧南を含む三河地方は、室町時代に蓮如上人が訪れ、浄土真宗を広めたところで、この地で

は上人はいまなお「蓮如さん」と呼ばれて親しまれている。彼が創建した西端の應仁寺では四月に法要が行われ、それに合わせて近所で「蓮如ウォーク」というイベントが開催される。そこでこの年最初の哲学対話は、蓮如上人が「御文章」等で残した言葉をもとに行った。

「ただ一念帰命の他力の信心を決定せしむるときは、さらに男女老少をえらばざるものなり。」(ただひたすら阿弥陀仏を頼りにするという他力の信仰を心に決めれば、そこに男も女も老いも若きも違いはまったくないのです)

「罪がふかければこそ、阿弥陀如来は御たすけあれ」と仰せられ候。(蓮如上人は「罪が深いからこそ、阿弥陀如来は助けてくださる」とおっしゃいました)

など、七つの言葉を取り上げた。そしてまず文章を読んで味わい、次に何を言っているのか考え、最後に「仏教から離れて」同じようなことが言えないか考えてもらった。参加者それぞれが一つ言葉を選び、それについて自分が考えたことを話す。全員が発表した後、自由に対話をした。

当地には、蓮如上人や真宗の教えについても詳しい年配の人がいるが、もちろんそうでない人もいる。とくに若い世代は、宗教そのものに縁が薄い。宗教のみならず、哲学にせよ他の学問にせよ、バックグラウンドも境遇も違う

人たちが共に話すのに、正しい理解、正しい知識にこだわると、よく知っている人が一方的に話し、他の人はただ聞くだけになるか、「私の方が分かっている」と言いたい人どうして論争になるだけである。

むしろ大事なものは、どんなことであれ、自分で考えてみることに、それも独断に陥らないよう、一人ではなく、他の人と一緒に考えることである。そのようにすると、私が哲学者として実感するように、専門家や「よく知っている」と思っている人でも、新たに気づかされることがあり、場合によっては、今まで自分の理解がいかに浅く一面的だったかを痛感する。他方、今までそのテーマに縁が薄かった人は、はじめてそれについて考えることができる。

もちろん宗教のような堅苦しいテーマである必要はまったくない。いつも企画と一緒に考え、無我苑の運営をなさっている館長の女性と話していた時、碧南は人參が特産品で、どの家庭でも「人參ごはん」という料理を作っていると聞いた。これはイベントに使えると思い、参加者に自分の家で作った人參ごはんを持ち寄っていたら、お互いに味見した後、人參について対話することにした。

家によって入れる具材が違って、人參だけの家もあれば、お揚げやこんにやくや鶏肉を

小さく刻んで入れている家もあった。あるおじいさんは、「人參ごはんは人參以外のものを入れていいなんて、この年まで知らなかった！」と驚いていた。また作り方を詳しく聞くと、一見炊き込みご飯のように見えていたのが、実はそうではなく、混ぜご飯の面もあることが分かった。まず具材を味付けして煮て、その煮汁でご飯を炊き、あとから具と混ぜるとというのが一般的な作り方の方であった。

他に地元の農家の人たちが、戦後に町の復興のためにどんなに苦労して人參を特産品にまでしたか、人參への熱い思いを語ってくださった。その盛り上がり方は、他の町から来た人が啞然とするほどだった。

また別の回では、碧南出身の工芸家である藤井達吉の作品を多く所蔵する藤井達吉現代美術館を会場にした。「見えないけれど確かにあるもの」「ありふれているようで実は珍しいもの」といった「お題」を一人一つ選び、そのテーマに合う絵（またはその一部）をカメラで撮影し、それを後でスクリーンに映し出し、それぞれ自分が選んだテーマと関連させて説明する。普段は絵を漫然と見ているだけだが、哲学的な（？）お題が与えられることで、見方が一変する。それをお互いに言葉にすることは、それじたいが哲学的な体験であった。

二〇二〇年からはオンラインとなって、日本全国から人々が参加するようになったため、そうした場所との結びつきはあまり考えず、多岐にわたるテーマで行った——「なぜ死を語るのか」「恋だの愛だの」「人生の目的は何か」「宗教とは何か」「コロナ禍の中で思うこと」「お金で幸せは買えるのか」「人はなぜ自由を求めるのか」「生きているだけで価値はあるのか」「なぜ世代で特徴が異なるのか」「哲学は何の役に立つのか」「正月はめでたいか」などである。

どんなテーマであっても、他の人、それもいろいろな世代の人、自分とは異なる人生を歩んできた人と対話をして一緒に考えると、当初自分にはあまり関係ないと思っていたことが意外に身近な問題であったり、一見些細なことに深く考えないといけないことがあったりすることに気づく。そこで考えることは、人によって違う。だから、誰か頭のいい人がいたら、その人に考えてもらえばいいとか、偉い人が考えたことを学べばいいということではない。自分で考えることでしか、その思考は自分のものにはならない。どんなに稚拙であっても、自分で考えることが重要なのである。

(かじたに しんじ・東京大学大学院総合文化研究科教授
著書に、「書くとはどういうことか」(飛鳥新社、二〇二二)、
「問うとはどういうことか」(大和書房、二〇二三)など。